

藝術と町家の出会い 豊崎プラザにて3日間の展覧会「藝術のすみか」を開催
Art Meets Traditional Townhouse: “Art Dwelling”, an Exhibition at the Toyosaki Plaza



展示風景 黒田武志氏と木鳥 works の ERECO 氏による作品

初夏の3日間、「藝術のすみか」という展覧会が豊崎プラザで開催された。都市研究プラザの現場プラザのひとつである豊崎プラザ（豊崎長屋主屋）は、明治から大正時代に建てられた長屋群に囲まれた町家であり、国の登録有形文化財となっている。この町家の座敷や土間、縁側を使った展覧会が「藝術のすみか」である。豊崎長屋に住む作家である repair の2人による企画は、「あの日、ぼくは種をまいた ここに居るとしらせるために」という言葉からはじまる。ここでは、あたり前のように耳にしている『ゲイジツ』という言葉にスポットライトをあて、repair の2人が共通のテーマを感じる数人の作家による展示が行われた。

合わせて、2日目には小さな演奏会とギャラリートークが開かれた。ギャラリートークでは、「日本家屋と展示について」が話題になった。企画した repair の日下明氏と谷口有佳氏によると、日本家屋には、床の間という美の空間がきちんとあり、このような空間を壊さないように、寄り添うように作品を展示しているという。また、日本家屋は、光と影のコントラストがはっきりしているため、光と影の部分が明確にある作家を集めている。

ホワイトキューブと呼ばれる一般的なギャラリーの白い空

間に展示する場合と今回の展示を比較すると、様々な意見が出された。黒田武志氏によると、「白い壁の所に自分の世界をつくるのか、「すでにここにある世界に自分が寄り添うことによってできる自分の世界をつくるのかに違いがある。あるいは、長居ができたり、座って作品を見たりとじっくりと作品に向き合える点が特徴となっている。ギャラリーでは、一瞥しただけで作品を見た気になってしまうが、ここでは、くつろぎながら作品と対峙することができて、その結果、作品の細部や作家の工夫にまで鑑賞がおよびやすくなるという。天候によって作品の見え方が変わることも、この展覧会の醍醐味かもしれない。3日間の期間中は、多数の来場者に恵まれた。長時間くつろぎながら鑑賞して、雨天と晴れ間の両方を楽しむ人や繰り返し来場される人などがみられ、多様な鑑賞体験を提供できたと思われる。この展覧会は今回で3回目であり、今後も継続予定である。

■小池志保子（生活科学研究科准教授）

The Toyosaki Plaza is a traditional townhouse surrounded by a group of terraced houses built at the beginning of the 20th century, and is today a registered tangible cultural property of Japan. As venue of the exhibition “art dwelling” the various rooms and veranda of the townhouse were utilized. During the three days of exhibition, people were observed, who appreciated the exhibits in a relaxed atmosphere over a long time, enjoying both rainy weather and moments in which the sky cleared up, or who repeatedly visited the exhibition, suggesting that it provided a variety of experiences. This kind of exhibition was held for the third time, and further exhibitions are planned.

◆ 展覧会詳細 ◆

○日時：2016年5月27日～29日 ※28日15:00から参加作家によるギャラリートークと repair による小さな演奏会

○参加作家：黒田 武志、木鳥 works、渡部 真由美、森 綾花、repair

○場所：大阪市立大学都市研究プラザ豊崎プラザ（豊崎長屋主屋） ○入場無料

○主催：大阪市立大学都市研究プラザ豊崎プラザ&絵と音と言葉のユニット『repair』



On 25 May 2016, the URP organized an international colloquium inviting Matthew D. Marr (Florida International University) to present his latest book on exiting homelessness in Tokyo and Los Angeles. The content was structured around the aid measures in both cities as well as structural factors concerning the labor market, housing and welfare governance.

国際コロキウム "Better Must Come" International Colloquium "Better Must Come"

2016年5月25日マシュー・D・マー氏（フロリダ国際大学准教授、URP 特別研究員）をお招きし、2015年の著書『Better Must Come: Exiting Homelessness in Two Global Cities』を紹介していただいた。

主要なテーマは、日本（東京）とアメリカ（ロサンゼルス）における脱ホームレス過程のグローバルとローカルなコンテキストのあり方についてであり、マー氏は、脱ホームレス過程を明らかにするために、両都市においてホームレスの中間施設の入所経験者（17名ずつ）を対象にした経時的調査を行った。

こうした研究方法から、主に2つの論点が進められ、1点目は、ホームレス問題があくまで個人が抱える問題というより、むしろ「社会的に生成された苦境」であり、2点目は、ホームレスがただ単にグローバル化による「犠牲者」ではなく、むしろ両国のローカルな福祉制度や労働市場、住宅市場、支援制度のあり方が脱ホームレスの可能性と密接に関係していることである。

両国の共通点に関しては、ホームレス当事者が自らの苦境を改善する姿勢、そして諸制度・諸市場での苦闘が顕著である一方、相違点に関しては、

中間施設スタッフによる支援の程度、適切な社会保障と住宅資源へのアクセスの有無が最も影響力を有している。

フロアからも、こうしたホームレス当事者が置かれた立場から構造的な問題を分析するアプローチは高く評価されるべきであり、方法論的にも大変参考になるとの意見があった。

■クムズ・メリチ（URP 特別研究員〔若手・先端都市〕）

「刑務所ぐらし、シャバぐらし第1回ワークショップ」 Life in Prison and the World Outside (1st Workshop)

刑務所出所者が円滑に社会に居場所を見つけるためには何が必要だろうか？

刑務所出所者と社会に関して研究をしている多分野の研究者、および刑務所出所者への支援者が集まりこの問題について議論を重ねる中で形作られたのが、彼らが戻る社会に目を向けて、社会の側が出所者を受け入れるチカラを身につけることを目的としたこのワークショップである。

2016年5月23日、大阪市北区の豊崎東会館において、「刑務所ぐらし、シャバぐらし」と題された連続ワークショップの第1回目「刑務所ってなんのためにあるの？」が開催された。これは都市研究プラザ研究員等と一般社団法人よりそいネットおおさかが「シャバの空気をおいしくする会」を結成し、運営するものである。

今回は、都市研究プラザ特別研究員である安田恵美から、「刑務所のセカイ」と題して、刑務所の目的、受刑者が抱える様々な問題、刑務所の制度等について簡単に情報提供をしながら、参加者相互がいくつかの論点について議論を行うという形で実施された。フロアに様々な専門家を配置することにより、大学生等からのひとつの素朴な発言に対し、それぞれ

の専門性に基づいた発言を行っていくという相互作用によって、「刑務所のセカイ」に対する議論が活発に行われた。今回のワークショップは地域のチカラを醸成する第一歩となっただけでなく、支援者、研究者のチカラをも増強する機会にもなったと思われる。

■安田恵美（國學院大学専任講師・URP 特別研究員）



What is required that former prisoners smoothly find their place in society? Researchers from multiple disciplines and supporters of ex-offenders came together, and held a workshop with the aim to increase the ability of society to accommodate people released from prison.



*出所者支援にかんしてご関心のある方は、こちらのURPブックレットもごらんください（編集部）。

出所者支援ネットワーク学習会（@東海） Study Meeting of the Support Network for Former Prisoners

近年、生活困窮者支援の現場において、矯正施設等出所者の存在が（発見）されるようになり、「何か特別な支援が必要なの？」「誰に相談をしたらいいの？」といった現場からの「戸惑い」の声をどこかしこで耳にするようになってきた。地域の福祉課題として黎明期にある「出所者支援」という新領域における支援者間の連携が喫緊の問題となりつつあるのだ。

そこで当研究チームでは、おもに東海3県を中心に出所者支援をおこなっている実践家の人たちとの学び合いの場を設定することを目的として、出所者支援ネットワーク学習会（@東海）を開催している。

第1回は共同研究者でもある橋本恵一（ささしまサポートセンター）に野宿者支援の実践のなかで出会う出所者の実像と課題について、第2回は三角元さん（名古屋保護観察所）に更生保護の担い手としての多機関連携の重要性について、第3回は千葉龍一さん（NPO 法人日本駆け込み寺）にメディア等でも注目されている「出所者居酒屋」の活動についてお話をいただき、活発な議論がおこなわれた。第4回は飯田智子さん（NPO 法人静岡司法ネット明日の空）に出所者支援専門の団体の立場からお話をさせていただくことになっている。

回を重ねるごとに参加者も増え、刑務所の福祉専門官の方々等の参加もあり、支援者間のヨコのつながりをつくる、という当初の目標がすこしずつではあるが形成されつつあるさまを肌でかんじ、ますます今後の展開に胸を躍らせているところである。

■掛川直之（URP 特別研究員〔若手・先端都市〕）



The study meeting was organized in order to set up a platform to learn together with experts engaged in support for people released from correction facilities. Mainly people from three prefectures of the Tokai region participated. Each time the meeting is held participants increase, and the initial aim takes a little bit more shape.

タイ音楽ワークショップ Workshop for Music from Thailand

今回のワークショップ（場所：大阪市立大学高原記念館）は船場アートカフェに拠点を置いて活動している、タイ音楽の市民団体「スリヤサンキート」のメンバーが中心となって企画されました。講師はチュラロンコン大学芸術学部タイ音楽学科のパッターラー・コムカム講師とカムコム・ポーンブラシット准教授で、スリヤサンキートの長澤明子代表が通訳をしました。

チュラロンコン大学芸術学部とは文学研究科が2002年に部局間協定を締結し、それを引き継ぐ形で都市研究プラザが共同研究・交流を推進し、教員・学生の交換のほか、過去14回にわたる都市文化研究フォーラムをバンコクで共催してきました。今回の講師陣は、2004年には大阪、奈良などで本学主催のコンサートを行う機会をもち、継続的にスリヤサンキートを指導してきました。スリヤサンキートは日本に2つしかないタイ音楽の合奏団で（もうひとつは東京）、演奏会のほか、毎月船場アートカフェにて市民向けのワークショップを行い、大学の地域貢献に寄与しています。

今回は「タイの吹奏楽器ピーチャワの実習」をテーマに、15名の参加者全員に楽器が貸与され、午前10時から午後4時まで休憩を挟んでみっちり5時間のレッスンが行われました。日本の箏楽に似た楽器で、初めは音を出すのも苦労していましたが、タンギングや音階練習を重ねて、キックボクシング「ムエタイ」で使われる「ケークチャオセン」という曲が演奏できるようになりました。最後は講師の演奏する太鼓に乗って、初めから通しました。

■長澤明子（スリヤサンキート代表）



Together with two teachers of the Chulalongkorn University's Arts Department a practical training with the *pui chawa*, a wind instrument from Thailand, was conducted. With this instrument, that is used to accompany "Muay Thai" kick boxing, the song "Kaeg Chao Sen" was mastered.

国際共同シンポジウム 日中韓における貧困と社会政策

International Collaborative Symposium: Poverty and Social Policies in Japan, China and Korea



2016年6月4日(土)、本学梅田サテライトにて、「日中韓における貧困と社会政策」と題し、公開シンポジウムを実施した。報告者は日本から1名、中国から4名(上海交通大学1名と中国社会科学院3名)、韓国から3名(韓国保健社会研究院)であった。本シンポジウムは、日中韓の研究者による共同研究プロジェクトの一環として実施されたものであり、来年末には研究成果を日中韓において各国語で同時出版する予定である。近年、東・東南アジア各国で社会保障制度の整備が進み、国際的な研究大会等を通じ、研究者間の交流も行われるようになったが、今回は、特に各国の貧困層や生活困窮の課題に対する政策を研究対象とした。ここ数年、日本では2013年末に生活保護法の改正と生活困窮者自立支援法の制定が見られ、韓国では2015年7月に日本の生活保護にあたる国民基礎生活保障制度が抜本的に改正され(写真のノ・デミョン氏はこの改革を主導してきた人物)、中国では2014年5月に社会救助暫定弁法が施行される等、制度上の大きな改革がほぼ同時期に実施されている。また、給付だけで

なく、地域における相談支援体制も同時に整備されようとしており、日本では生活困窮者自立支援制度に基づく相談支援センターが全国の福祉事務所設置自治体で必置化され、韓国では地域(邑面洞)におけるワンストップセンターの設置が、中国では社区(コミュニティ)における公共サービスや福利サービスの提供体制づくりがそれぞれ進められている。今回のシンポジウムにおいても、これらに関する最新の現況が報告された。これまで東アジアの福祉は欧米の福祉国家を参照しながら比較研究が進められてきたが、我々の最終的な目標は、貧困政策に関する東アジア独自の研究ネットワークの構築と、東アジア独自の分析枠組みを提示することにある。大それた目標かもしれないが、大きな目標を持つことは悪いことではないだろう。

■五石敬路(創造都市研究科准教授)

As part of a collaborative research project between researchers from Japan, China and Korea a symposium was held in order to think about poverty and social policies in these three countries. Participants reported about the latest developments in each country, and a plan to publish the research results next year at the same time in Japan, China and Korea in three languages was created. The final aim is to build a unique research network for poverty policies in East Asia and advance an East Asian framework for analyses.

都市研究プラザ10周年記念国際シンポジウム
レジリエンス
復元力のある都市をめざして

ーアジアと欧州を架橋する先端的都市論

■会期：2016年9月22日(木)～24日(土)

- 場所：22～23日：大阪国際交流センター、24日：グランフロント大阪
- 22日：基調講演「文化創造によるレジリエンス」、メインセッション「都市創造性、アート、ローカルな多様性とレジリエンス」ほか
 - 23日：「社会に関与するアートとデザイン」「植物園とレジリエンス」「レジリエンスと多様性都市」ワークショップほか
 - 24日：「包摂都市を構想するー包摂型アジア都市論の挑戦」「北欧とアジアに学ぶ刑務所出所者の社会的包摂」

大阪市立大学都市研究プラザ ニュースレター 第32号
編集長(発行責任者) 阿部昌樹
副編集長 水内俊雄 岡野浩 全弘奎
編集主幹 鄭栄鎮 尾形由記
<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/staff/>

URP
Osaka City University | Urban Research Plaza
大阪市立大学 都市研究プラザ

「都市研究プラザ」は、都市再生へのチャレンジとして大阪市立大学が2006年4月に設立した全く新しいタイプの研究教育組織です。「プラザ」という名前が示すように、都市をテーマとする人々が出会い、集まる広場をめざしています。先端的都市研究拠点として、現場や海外での研究・まちづくり活動、さらに、世界第一線級の研究者や政策家と国際的なネットワークを構築しています。

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/>

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 tel.06-6605-2071
e-mail: office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp
所長 阿部昌樹 副所長 水内俊雄 加幡真一
ユニット長 1U 阿部昌樹 2U 嘉名光市 3U 水内俊雄 4U 岡野浩